いわゆる Contact Clause について

―定冠詞 *the* の機能―

秋　山　庵　然

0.0. Jespersen は次の(1)―(3)におけるような関係詞節（relative clause）を接触節（Contact Clause）とよんで，とくに関係詞に導かれる関係詞節と区別している[1]。

（1）He has found the key *you lost yesterday.*

（2）This is the boy *we spoke of.*

（3）There is a man below *wants to speak to you.*[2]

この関係詞節の特徴は，(i) 関係詞に導かれない，(ii) 節の前に休止（pause）をおくことができない，(iii) つねに制限的（restrictive）である，(iv) 節とそれに先行するもの（つまり，先行詞とよばれる NP）とが意味の上で密接に触れ合っている，ということである。[3]

0.1. これを逆に言えば，(ii)―(iii) の条件が満たされてはじめて (i) の状態が表出する，とも言えよう。したがって，たとえば (ii) の条件が満たされなくては

（4）? He has found the key--- (pause) ∅ you lost yesterday.

書かれたものではこのようなことはあり得ないし，また発話においても――休止の長さにもよるが――you lost yesterday が the key を先行詞とする関係詞節であると理解される度合が減少することは確かである。休止がある時間的長さの限度を超えてしまえば，He has found the key. となり，この文はこれで完結したものとして理解されよう。そしてこの発話が「その鍵」が話題になっている場でなされればそれでいいが，それ以外の（つまり，初めて key が出て来たような）情況で発話されたとすると，幾分奇妙な発話となり，聞き手はその鍵の説明があるのを期待する，ということになる。[4] 一方，関係節であるべき you lost yesterday の部分は lost の目的語が不明で，これまた奇妙な発話に終る。結局，you lost yesterday は関係詞節の機能を果さない，ということになる。

0.2. さて，本稿の目的とするところではないが，英語の関係(代名)詞を歴史的にさかのぼってみると——

インド・ヨーロッパ祖語（Proto-Indo-European）には関係代名詞は存在していない。したがって，この語族の各国語はそれぞれの方法により関係代名詞を作り出したと考えられている。

関係詞節は，最初は Parataxis （co-ordination）の関係にあった二つの節の一つを Hypotaxis （subordination）の関係におくところから生じた。たとえば前掲の（3）がその典型的なものといわれている。[5] その後，関係詞節を明示するために，***that*** が使用されるようになった。***Wh***-relatives の方は，最初は不定の関係代名詞として使用されていたが，次第に先行詞をとる今日の関係代名詞となったものである。***what*** はいまでも先行詞をとらない。

したがって，学校文法においては接触節について，関係詞が省略されたものとして説明が与えられるが歴史的にはこの説明は誤りであるということになる。

1. 変形文法では英語の関係詞節をどのように扱っているのだろうか。(5a) のような構造を（5b）のような構造に変える変形，すなわち関係詞節変形（relative clause formation）については，さまざまな分析が提出されているが，その一つは次に示す（6）のようなものである。[6]

（5）a. --- [$_{NP}$the book [$_{S}$ I bought the book yesterday]] ---

b. --- [$_{NP}$the book [$_{S}$ which I bought yesterday]] ---

（6）関係詞節変形（relative clause formation）

S D: X— [$_{NP}$NP— [$_{S}$ X—NP—X]]—X

S C: 1 2 3 4 5 6 $\xrightarrow{\text{OBLIG}}$

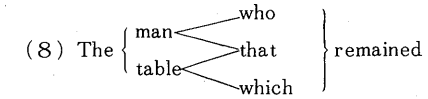
1 2 4 + [3 ∅ 5] 6

この場合，主体文の中の NP と埋め込み文の中の NP が同一の音形をもち，同一物を指すものであるという条件を満たさなければならない。したがって，（7）のような構造は，埋め込文（[$_{S}$he saw the hippopotamus]）の中に主体文中の NP（the man）をもっておらず，この条件を満たさない。ゆえにこの深層構造は文法的な表層構造に変形されることは不可能である。

（7）the man [$_{S}$he saw the hippopotamus] adored peanuts

関係代名詞は，もし当該の NP に [+human] という素性があれば，who か that

が選ばれ，もし当該の NP に［—human］の素性があれば，that か which が選ばれ，結果的には次の（8）のような選択を示すことになる。

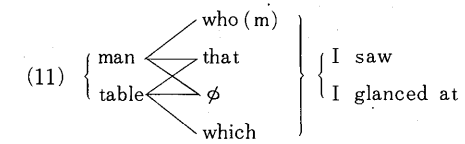


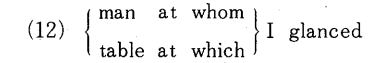
もし当該の NP が前置詞の目的語であれば，前置詞は NP といっしょに移されても移されなくともよい。ただ，前置詞が移された場合には，who の代りに whom が選ばれなければならず，that は選ばれてはならない。また前置詞がいっしょに移されたときには関係詞をφにすることはできない。（9）（10）はこれを示す。

（9）She is the girl with whom we talked.

（10）*She is the girl with φ we talked.

したがってその選択は（11）（12）のようになる。[7]





そしてまた NP が関係詞節内の動詞の目的語または前置詞の目的語になっているときには関係詞はφになり得る。しかし，NP が深層構造の主語から派生している場合には，これをφにすることはできない。そして消去変形（deletion transformation）はこの条件下で任意（optional）に適用される。

2．さて，本題の関係詞節と定冠詞 *the* との関係について，接触節の分布の類型別に考察してみることにする。

〈1〉（X——）*the* + Noun + φ［Relative Clause］（——X）

（13）（＝1）He found *the* key φ you lost yesterday.

（14）　*The* film φ I saw last week was excellent.

（15）　They should repent *the* money φ they spent.

（13）—（15）などがこの型に属し，この名詞のほとんどが関係詞節内の動詞の目的

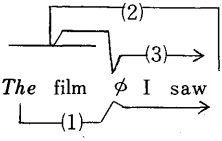
語となるものである。学校文法でも「関係詞節などにより意味が限定される場合」の定冠詞 *the* の用法として挙げられるものである。たとえば，(14) は

(16) I saw *a* film.

(17) *The* film was excellent.

から派生し，関係詞節変形の結果 (14) になったと考えられる。明らかに関係詞節があるゆえに *the* film となったものである。このように関係詞節を伴えば名詞の前では定冠詞 *the* が使用される。

したがって，その場において初めて *the*＋名詞 が発話の中に現われると，その *the* は直後にその名詞を修飾するものがくることを暗示する機能をもつと言ってよい。そして英語の関係詞節構造は必ず不完全構造になっているので，つまり名詞が関係詞節の動詞の目的語になっている場合は関係詞節内には目的語になっている名詞が存在しないので，このことがφ関係詞節でその関係詞節を追認知する要素になっている。聞き手側に関係詞節が認知される過程は (18) のようになろう。



この型にはまた関係詞節によって修飾される名詞が関係詞節内の（今述べたような動詞の目的語ではなくて）前置詞の目的語になっているものもある。

(19) *The* man φ we spoke *of* died yesterday.

(20) *The* books φ I am most interested *in* are books on linguistics.

the を伴って名詞が現われると，その *the* は直後に何かその名詞を修飾するものが存在することを暗示するらしいことがわかったが，さらに (19) (20) のように関係詞節内に先行詞の名詞を目的語にとる前置詞があると，先行詞が関係詞節の動詞の目的語である場合よりさらに関係詞節構造内の不完全さ，不安定さが高められていいかえれば前置詞の目的語が前者の場合のそれよりさらに強く求められることになる。

このことに関連して日本語の関係詞節化についてみる。日本語の関係詞節構造は，（英語のそれが「右枝分れ」であるのに対して）「左枝分れ」であり，関係詞節化は基本的には格助詞の「は」が「が」に変化し，音調を下げないという特徴をもつのみで，英語の関係代名詞に相当するものは存在しない。[8]

(21) a. 私は少女に会った。

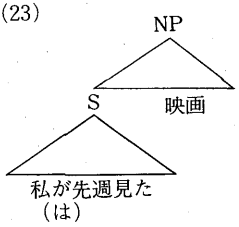
b. [私があった] 少女

(22) a. 私は週刊誌を読んだ。

b. [私が読んだ] 週刊誌

(14) の関係詞節を含む [$_{NP}$the film [$_{S}$I saw last week]] に相当する日本語の関係詞節構造は (23) のようになる。

(23)



とにかく関係詞節の前にも後にも関係詞節を明示するものは何も存在しない。この意味では，日本語における関係詞節はすべてここで問題にしている接触節といってよかろう。また日本語の場合，英語の関係詞節に前置詞が現われるような場合でも，多くはその前置詞に対応するものは存在しない。[9] たとえば，

(24) a. 彼は肉をこのナイフで切った。

b. これは (が) [彼が肉を切った] ナイフです。

c. This is the knife with which he cut the meat.

d. This is the knife ∅ he cut the meat *with*.

e.*これは [彼がそれで肉を切った] ナイフです。

(24a) から「ナイフ」をヘッド (head) にして (英語におけるそれに統一して先行詞と考えてもいいが，日本語の場合は後行詞とも言うべき位置にある)，関係詞節化すると (24b) になり，(24e) にはならない。

ところが，日本語でも方向，起点，到達点，対象などを示すものが含まれるときには，関係詞化してもそれが現われてくることがある。たとえば，

(25) a. 彼は会社から電話をかけた。

b. ?[彼が電話をかけた] 会社

c. [彼がそこから電話をかけた] 会社

のようになる。つまり，(25b) では [$_{NP}$[$_{S}$彼がその会社から電話をかけた] その会

社］であるのか，［$_{NP}$［$_{S}$彼がその会社に電話をかけた］その会社］であるのかあいまいになる。また久野（1973）によれば，[10] 日本語の関係詞節には，関係代名詞化されたはずの名詞が代名詞のカタチで残されることがある。たとえば，

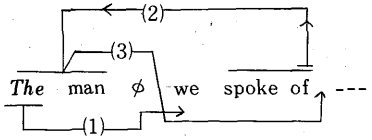
(26) ［私が $\left\{\begin{array}{c}\text{ソノ人}\\ \text{彼}\\ \text{ソ}\end{array}\right\}$ の名前を忘れてしまった］お客

英語では（26）に対応する構文は非文法的である。

(27) the guest *that* *I* have forgotten $\left\{\begin{array}{l}\textit{his}\ \text{name}\\ \text{the name of}\ \textit{him / that person}\end{array}\right.$

さて，戻って英語の関係詞節内に先行詞を目的語とする前置詞がある場合にはそれによる追認知の機能が高められるから（18）と同様にして図示すれば（28）のようになろう。

(28)



〈2〉 It is + *the* + Noun + φ ［Relative Clause］

これはいわゆる強調構文あるいは強意構文とよばれている構文形式であって，It is---that--- がその典型的な形式であるが，この変形形式として，It の部分が That, This, These になる形式がある。また that の部分が who, which をとることもある。まとめると（29）のようになる。

(29) $\left\{\begin{array}{l}\text{It}\\ \text{That}\\ \text{This}\\ \text{These}\end{array}\right\}\left\{\begin{array}{l}\text{is}\\ \text{are}\end{array}\right\}+\ \textit{the}\ +\ \text{Noun}\ +\left\{\begin{array}{l}\text{that}\\ \text{who}\\ \text{which}\end{array}\right\}$---

{that / who / which} が {φ} になるとき，これは接触節である。ここでは先行詞が関係詞節の動詞または前置詞の目的語である場合と，先行詞が関係詞節の主語となる場合とがある。前者については〈1〉で説明されるので省略する。ここでは後者に

ついて考察する。

この形式は要するに強めたいと思う名詞（句や節のこともある）を it is---that の間にはさみこむ形式である。したがって Jespersen の言うように，これは一種の外位置（Extraposition）であって，

[Extraposition]

(30) [It is] I [that] am to blame.

からわかるように I は am to blame に直結している。[It is] と [that] は I am to blame に対して外位置の関係にある。いまこの *that* が φ であるわけであるから，

(31) It is I am to blame.

S_1　S_2

S_1，S_2 のもつそれぞれの意味内容からすれば，直前に明示的に it の指示するものがなければ（そしてここではこの場合を除外すると仮定しているわけであるから），S_1 はほとんど意味内容をもたず，当然 $S_1 < S_2$ ということになる。したがって，聞き手側からしても (31) のような文，つまり (29) の形式に含まれるすべての文は S_2 が関係詞が存在しない結果，かえって全く普通の文となっており，関係詞節を明示する関係詞が存在しないことによる不利益はないことになる。

なお，この形式では *that*（*who / which*）がしばしば φ になるほか，ときには文頭の *It*（*That / This / These*）までも除かれてしまうことがある。しかし，It is も that もなくなってしまってはこの構文形式の特性を失ってしまうので，両方が同時に除かれることはない。(32) は文頭の [These / Those are] が除かれたものと考えられるが，*that* は現われている例である。

(32) The hawks, he thought, *that* come out to seat to meet them.[11]

(33) [These / Those are] the hawks (, he thought,) *that* come out to seat to meet them.

〈3〉 There is + *a / an* + Noun + φ [Relative Clause]

(34) There is a man below φ wants to speak to you.

(35) There is a willow φ grows aslant a brook.

上の (34) (35) などがこの型に属する。〈1〉で直後に関係詞節を従えると，その名詞

は定冠詞 *the* をとることを述べた。ここでは名詞が関係詞節の主語となることが多いのであるが，なぜ *the* をとらないのであろうか。それは *There is* 構文の特異性によるものと思われる。つまり，中島（1961）も言うように，文頭の *there* は意味内容のない形式語で強勢をもたず，*is* と一緒になって［ðəriz / ðəz］と発音される。[12] そしてたとえば（35）について言えば，willow がはじめて知覚されたとき，それを承認するという単純判断にすぎないのである。[13]〈2〉の（31）と同様に（35）は

(36) $\underbrace{\text{There is a willow}}_{S_1}\ \underbrace{\text{grows aslant a brook.}}_{S_2}$

ということになる。S_1 の *There is* は実質的な意味をもたないのであるから，意味内容的には当然 $S_1 < S_2$ となり，かつ関係詞が ϕ であるから，

(37) (There is) $\underbrace{\text{a willow } \phi \text{ grows aslant a brook.}}_{S_2}$

となり，S_2 が主体文のように知覚され，きわめて容易に理解される結果となる。ここにおいても〈2〉と同様に，関係詞が存在しないことによる文理解上の支障は生じない。そして，*There is* 構文は，何か知覚の対象をはじめてもち出すときに用いられる表現形式であるから当然冠詞も不定冠詞をとることになる。[14]

There と *It* がともに形式語であることは古い英語で *There is* の代わりに *It is* が用いられたことからもわかる。[15]

ところが，Perlmutter が指摘しているように，*There is* 構文においても次のような現象が生ずる。

(38) a. In England there was never *a* problem.

b.* In England there was never *the* problem.

c. In England there was never *the* problem that there was in America.

つまり，今述べたように，*there is* 構文ではふつう不定冠詞（*a* / *an*）だけが現われ，(38b) のように定冠詞（*the*）は現われないのであるが，(38c) のように problem の後に関係詞節を従えると定冠詞が現われることがある。[16] だとすると，この *the* は〈1〉で述べたように，後に関係詞節が存在することを imply する重大な要素であることを証明している。また関係詞が ϕ の場合に——(38c) の *that* は削除するこ

とが可能である—— *the* の機能の重要性をさらに保証するものである。

〈4〉 Here is + *a* / *an* + Noun + ∅ [Relative Clause]

(39) Here is a lady ∅ wants to know you.

(39) などが〈4〉の型の例であるが，*Here is* 構文はまったく〈3〉の *There is* 構文に準ずるので省略する。

Curm は

(40) Here is *the* book ∅ you lent me.

において，この *the* は（関係詞）節を主命題（principal proposition）に結びつける連結詞であると言い，Jespersen はこの意見に対して，それでは

(41) There are people he dislikes.

にはそのような連結詞はないというのか，と反論しているが，[17] Curm の意見も Connective という用語の良し悪しは別として，*the* には今まで述べてきたように後に関係詞節の存在を暗示する重大な機能があることを考えれば，あながち不当であるとは言えない。(41) は *There is* 構文の特異性と people という名詞の特性，そして〈1〉で述べた関係詞節構造の不完全さがもつ追認知の機能により説明されよう。

3．結　語

以上の考察から次の結論が得られよう。

(1) 関係詞節によって修飾される名詞には必ず定冠詞 *the* が現われる。したがって，接触節においては *the* がその直後の関係詞節の存在を imply する高度の機能をもつ。Only などの強意語はその機能を補強する。

(2) 関係詞節構造の不完全さが関係詞節を追認知する。その場合，先行詞が関係詞節内の動詞の目的語であるときより前置詞の目的語であるときの方が，より追認知機能が高いと考えられる。

(3) *There is* / *Here is* 構文ではふつう定冠詞 *the* は現われないが，これはこの構文の特異性により，説明される。またこの構文でも（1）の規制にしたがって定冠詞が現われてくることもある。

このほか，二重制限の関係詞節，関係詞節の意味内容と定冠詞との関係などについ

ては稿を改めたい。

Notes :

1. Jespersen (1909—49) (Part Ⅲ) p. 132. ちなみに, Curm はこれを非連辞的関係構文 (Asyndetic Relative Construction) とよび, 非制限用法のあることも認めている。(Curm (1931) p. 233)

2. (1)—(3) *Loc. cit.*

3. *Loc. cit.*

4. He found the key. だけで発話・文が完結しても何ら不自然でない場合, つまり直前に ***the key*** が明示的に示されている場合は除外する。

5. Ichikawa and others (1940 ; 増補1954), Ishibashi and others (1973), etc. この構造はよく, 本来はギリシャ語文法の用語である apo coinou (共有構文) でで説明される。つまり,

(3) There is a man below wants to speak to you.

a. There is ***a man below.***

b. ***A man below*** wants to speak to you.

a. と b. はそれぞれ同一語句 (***a man below***) を共有している。そして (3) は a. と b. の中間にあって, 二度表わすべきものを一度ですませたものとして説明される。

6. Kajita (1974) p. 335.

7. (8) (11) (12) Quirk & Greenbaum (1973) p. 381.

8. もっとも, きわめて直訳調・翻訳調の日本語では, 関係詞節とそれによって修飾される名詞との間に「ところの」という関係詞に相当するものが使用されることはあるが, これは一般的でなく, かつ,

(a) 我々が愛しているところの自由

は英語に直訳すると,

(b) liberty, (which) is the thing (place) (which) we love

となり，結局構文法上「我々が愛している」が修飾しているのは「自由」ではなくて，「ところ」である。したがって，「我々が愛している」は，関係代名詞の介在なしに，名詞「ところ」を修飾していることになり，直訳調・翻訳調の日本語でも構文法上関係代名詞と呼び得る形式がないと言える。

9．(24) (25) 秋山「日本語の関係(詞)節化における動詞の削除について」未発表資料。

10. Kuno, *op. cit.,* pp. 150–151.

11. E. Hemingway, *The Old Man and the Sea.* 樋口日出雄氏の御指摘による。

12. There は「そこに(へ,で)」の意味のときは［ðɛ́ə］と発音され，There is (There's)--- のときの［ðəriz / ðəz］と区別される。

13. Nakajima (1961) p. 126.

14. 名詞が文脈または場によって限定されるときには，定冠詞をとることもある。
But there was *the* baby. / There's *the* rub. (Kanaguchi (1970) p. 96.)

15. Hit arn aboute on this bench bot berdles chylder. (There are about on this bench only beardless children.)—— *Sir Gawayn and the Grene Knyght,* 1. 280. (Nakajima, *op. cit.,* pp. 127–128.)

16. Perlmutter (1970).

17. Jespersen. *op. cit.,* p. 153.

REFERENCES

Araki, Kazuo (荒木一雄). 1954.『関係詞』(英文法シリーズ５).

Curm, George O. 1931. *Syntax.*

Egawa, Taiichiro (江川泰一郎). 1955.『代名詞』(英文法シリーズ４).

Harada, Kazuko (原田かづ子). 1971.「冠詞と関係詞節の相互関係」『英語学(第６号)』.

Ikeda, Giichiro (池田義一郎). 1967.『否定・疑問・強意・感情の表現』(英語の語法・表現篇第６巻).

Jespersen, Otto. 1913—1949. *A Modern English Grammar on Historical Principles*. Part Ⅲ

Kajita, Masaru (梶田優). 1968.「変換文法における関係詞節の問題」『英語教育』.

_____. 1974.『文法論Ⅱ』(英語学大系第4巻).

Kamio, Akio (神尾昭雄). 1973.「文の理解と記憶」『現代思想』.

Kuno, Susumu (久野暲). 1973. *The Structure of the Japanese Language*.

_____. 1973.『日本文法研究』.

Mikami, Akira (三上章). 1960.『象は鼻が長い』.

Nakajima, Fumio (中島文雄). 1961.『英文法の体系』.

Perlmutter, David M. 1970. "On the article in English." In Manfred Bierwisch and Karl E. Heidolph (eds.), *Progress in Linguistics*, pp.233—248.

Umemoto, Akira (上本明). 1965.『現代英語の強意表現』.

(Dictionaries)

Ichikawa, Sanhi (市河三喜) and others. 1940. (Revised & Enlarged) 1970.『英語学辞典』.

Ishibashi, Kotaro (石橋幸太郎) and others. 1973.『現代英語学辞典』.

Kanaguchi, Yoshiaki (金口儀明). 1970.『英語冠詞活用辞典』.

Otsuka, Takanobu (大塚高信) and others. 1957. (Revised & Enlarged) 1970.『新英文法辞典』.